

「司馬遼太郎 記念館を訪れて」

歴史小説で有名な司馬遼太郎の名前はよく知っていたが、最初に司馬氏にお目にかかったのは大阪国立循環器病センターの10周年記念の講演会をお聞きしたときである。その時のお話で印象が深かったのは、司馬氏が“曲直部先生、心臓移植は日本で実行するのは中々むづかしいですよ、宗教観が欧米と全く違いますから”と言われたことである。人が亡くなった時のキリスト教的な考えと、仏教的な考えとは根本的に違うとおっしゃりたかったのだと思う。前者は死後、魂は天国に上り、死体は単なる亡骸といった考えであるのに、後者ではそうではないからであろう。

その折感心させられたのは、司馬氏がいかに博学で多くの歴史的な知識を持っておられると感じたことである。その後、「坂の上の雲」などを読みその印象をより強くした。

先日機会を作り、南河内、八戸ノ里の司馬遼太郎記念館を見学し、その膨大な蔵書や、執筆書、4万冊ともいわれる読書量には驚かされた。趣味は読書と執筆がほとんどであったと聞かされた。以下、その折に購入した本“菜の花の沖、一～六巻”を読んだ感想を述べる。

江戸末期に淡路島の小さな村から兵庫港に出てきた高田屋嘉兵衛が、苦労を重ね、千石～千五百石の帆船を持つようになり、兵庫の港から大船団を率いて、遠州灘を通り江戸へ、更に、瀬戸内海から九州、玄海灘、日本海の荒波を超え、北海道や現在問題となっている北方領土などの開発にいかに力を尽くしていたか、松前藩がいかに蝦夷地の住民を酷使していたか、江戸幕府と一緒にその改善にどれ程の力を尽くしたか、また、ラッコや黒テンの皮、貿易を求めて鎖国中の日本の北方領土を訪れるロシア人との厳しい交渉、軍艦の艦長との友情などあたらしい知識として得ることができた。これまで小さな島ぐらいにしか思っていなかった国後島は面積が淡路島の3倍、択捉島は5倍の広さを有することを初めて知り驚いた。当時、あまり人が住んでいなかった函館を開発し、立派な港湾都市にしたのは高田屋嘉兵衛の功績であることも知った。これら多くの土地の歴史や風土、地政学的な事実が詳しく記されている。改めて地理や当時の歴史の勉強をさせられた思いがした。

また、当時兵庫港からは、灘の酒や大阪からの米、衣類などの商品を江戸に運ぶ中心的な港であったことも知った。兵庫、大阪が上方であり、江戸へそれら商品を船に乗せて下っていったのである。

注) 広辞苑によれば明治維新以前は関西は上方であった。今でも上方落語、上方漫才などの言葉が残っている。

題名の菜の花は当時淡路島で多く栽培されていた花で、菜種油を大量に採取する方法を兵庫、芦屋で考案し、江戸その他へ運んでいたから付けた題名であろう。

司馬遼太郎記

平成 27 年 6 月 1 日

尼崎中央病院 吉田静雄